

司式:大谷昌恵
奏楽:堀口恵美

前奏:「装え、お愛する魂よ」(J.S. バッハ)

招詞:あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。(使1:8)

讃美歌:4「世にあるかぎりの」

罪の告白・赦し

聖霊を求める祈り

朗読聖書①イザヤ書 53:1-12

- 01 わたしたちの聞いたことを、誰が信じようか。主は御腕の力を誰に示されたことがあるうか。
- 02 乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように/この人は主の前に育った。見るべき面影はなく/輝かしい風格も、好ましい容姿もない。
- 03 彼は軽蔑され、人々に見捨てられ/多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し/わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。
- 04 彼が担ったのはわたしたちの病/彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに/わたしたちは思っていた/神の手にかかり、打たれたから/彼は苦しんでいるのだ、と。
- 05 彼が刺し貫かれたのは/わたしたちの背きのためであり/彼が打ち砕かれたのは/わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって/わたしたちに平和が与えられ/彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。
- 06 わたしたちは羊の群れ/道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて/主は彼に負わせられた。
- 07 苦役を課せられて、かがみ込み/彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように/毛を切る者の前に物を言わない羊のように/彼は口を開かなかった。
- 08 捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか/わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり/命ある者の地から断たれたことを。
- 09 彼は不法を働かず/その口に偽りもなかったのに/その墓は神に逆らう者と共にされ/富める者と共に葬られた。
- 10 病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ/彼は自らを償いの献げ物とした。彼は、子孫が未永く続くのを見る。主の望まれることは/彼の手によって成し遂げられる。
- 11 彼は自らの苦しみの実りを見/それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために/彼らの罪を自ら負った。
- 12 それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし/彼は戦利品としておびたしい人を受ける。彼が自らをなげうち、死んで/罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人の過ちを担い/背いた者のために執り成しをしたのは/この人であった。

朗読聖書②マタイによる福音書 8:14-17

◆多くの病人をいやす

- 14 イエスはペトロの家に行き、そのしゅうとめが熱を出して寝込んでいるのを御覧になった。
- 15 イエスがその手に触れられると、熱は去り、しゅうとめは起き上がってイエスをもてなした。
- 16 夕方になると、人々は悪霊に取りつかれた者を大勢連れて来た。イエスは言葉で悪霊を追い出し、病人を皆いやされた。
- 17 それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。「彼はわたしたちの患いを負い、/わたしたちの病を担った。」

祈禱

聖なる主なる神さま。聖名を崇め賛美致します。今日も、私たち一人ひとりにあなたが声をかけ、健康を与えてくださったので、こうして礼拝堂に集い、あるいは、オンラインで、御前に賛美と祈りを献げし、御言葉を戴くことができる幸いに感謝致します。

カレンダーは9月になりましたが、相変わらずの暑さが続き、私たちは長い夏に疲れを覚えています。しかし、9月を迎え、8月中はお休みしていた諸集會も再開し、これから秋の諸行事に向けての準備も進められていきます。暑さに心身の弱さも感じる私たちですが、神さまがどうか、そのような私たちの心を改めて奮い立たせ、信仰の歩みを強めてくださいますようにと心から願います。新たな一歩が、私たちの信仰共同体の大きな歩みへと繋がっていきますようにお導きください。

本日は佃雅之牧師が御言葉の取次ぎをさせていただきます。神さまどうか佃牧師の上に、あなたが聖霊を豊かに注ぎ、佃牧師があなたから受け取った御言葉を大胆に語るができますようにお守りください。また、本日は礼拝の中で聖晩餐が執り行われます。主によって開かれる食卓に与ることによって、夫々の信仰が今一度確かにされ、あなたの注いでくださる御恵みに感謝して歩むことができますように。聖晩餐の時を豊に祝してください。

今日、礼拝に与りたいと願いながらも、心身の不調のため、あるいはお歳を召してその思いが叶わない方、それらの方に付き添っておられる方など夫々のご事情で、御前に集うことができない方がいらっしゃいます。どうか、それらの方々の上にも、あなたからの豊かなお恵みと祝福がありますようにと祈ります。

神さま、本日、日本中、世界中の教会で献げられる全ての礼拝の上に、あなたから豊かな祝福がありますようにと願います。特に、困難な状況にある教会、牧者不在の教会、災害被災地の教会、また世界においては、国と国との戦いのために多くの人々が傷つき苦しんでいる教会の礼拝が、あなたによって特に顧みを与えられ、お恵が注がれますようにと祈ります。

この感謝と願いの祈り、私たちの救い主イエス・キリストの聖名を通して、御前にお献げを致します。アーメン。

合唱:「荒れ野に水はわきて」(聖歌隊)

説教 「苦難を共に負う」

佃 雅之

キリストは『山上の説教』を語り終え、山を降りて来られると、休むことなく癒しの御業を始められました。重い皮膚病を患っている人、中風で苦しんでいる百人隊長の僕、そして、今日の箇所では、熱を出して寝込んでいるペトロの姑を癒して差し上げたことが書かれています。

聖書には、「熱を出して寝込んでいた」としか書かれていませんが、姑が一言の言葉も発していないことから、彼女は手の施しようがない状態であったのではないかと思います。ここで語られている「病」は、ただ「体の不調」のことだけを指しているのではなく、「心の病、魂の病」と理解する人もいます。熱を出して、寝込んでいたペドロの姑の姿は、私たちにとって決して人ごとではありません。私たちも、生活の中で、「心も体も疲れ果てる」ということがあります。病、弱さ、孤独、葛藤に直面する時、自分の力の限界を思い知らされます。しかし、キリストは、その全てを見ておられます。そして、そのキリストの目は弟子たちだけではなく、その家族にまで向け

られているのです。「御覧になった」とあるように、私たちの苦しみを見過ごされず、深く心を寄せて、主自ら近づいてくださる方なのであります。シモンを癒されたキリストは、ここでも休むことなく、御業を続けられます。大勢の「悪霊に取りつかれた人たち」(ダイモニイ(δαίμονιάζουσαι))が、キリストを待ちかかっているのです。

「悪霊」(ダイモニオン(δαίμονιον))という言葉は、聖書には度々記されている言葉ですから、悪霊追放と福音宣教には深い関係があると考えられます。聖書で「悪霊」は、「汚れた霊」、「サタン」とも呼ばれます。当時の人々は、原因の分からない病や、心を蝕むような苦しみを、「悪霊の働き」と理解したたようです。しかし悪霊に取り憑かれたような悪魔的な事件は、今の私たちの日常の中にもあることです。

悪霊は、あらゆる時代に、あらゆる人を襲う恐るべき力として今も存在しています。なぜ人は悪霊に入りこまれてしまうのでしょうか。悪霊を辞書で引くと、「神より劣る存在、人間より優れた存在」と書かれています。つまり悪霊は、人間よりも強い力を持っているのです。そのために、私たちは時に、悪霊に入り込まれてしまいます。福音を宣べ伝える者にとって、悪霊を追い出すことは必要不可欠な業であったということになります。人を縛り付けている悪霊を追い出し続けることは、まさに、御言葉によって唯一真の神のもとに人間を取り戻す為の戦いなのです。御言葉を語り、癒しの御業によって人を救いへと招き、導く。これがキリストの日常であります。

マタイはどのように『山上の説教』の直後に、三つの癒しの物語を置いたのでしょうか。それはこの三つの癒しの物語を、自分が属する教会に対する警告と受け取ったからです。キリストの奇蹟行為の特徴は、ユダヤ教の宗教制度によって救いから遠ざけられた人々に向けられたところにあります。重い皮膚病の人たち、異邦人たち、悪霊に取り憑かれた人たちは「汚れた者」と蔑まれていました。当時の宗教指導者たちは、彼らを罪人として扱ったのです。しかし、キリストは、そのような彼らにこそ神の国が到来していることを告げます。なぜなら、キリストの癒しの目的は病気を治すことだけではなく、罪人とされている人を解放することにあるからです。それは、神の愛によって肉体も、魂も回復させて新しい命を与えるということです。しかしこの時、マタイの教会はキリストの教えに倣うことができずして、教会の中にキリストの教えに従うことの出来ない、御言葉を聞いても行おうとしない「悪霊に取り憑かれてしまっている人」が入り込んでいます。マタイは、今まさに、自分の属する教会が病に満ちていると受け止めたのであります。これは私たちの教会にも向けられている警告です。

マタイは教会が教会であるために、教会のリーダーとして、教会員にキリストがどのようなお方であったのかを思い起こさせさせます。キリストに立ち返ることなしに教会が生まれ変わることはできないからです。それが、今日の箇所最後に書かれている預言者イザヤの言葉です。マタイはキリストの地上でのお働きを思い起こして、「彼はわたしたちの患いを負い、わたしたちの病を担った」と言い表します。この言葉は、今日福音書と共に読まれましたイザヤ書 53 章 4 節の言葉です。ここで使われている「病」(חַוְּלָה)という言葉は、単なる体の病気だけを指してはいません。「生まれながらの人間が持つ弱さ全体、肉の弱さ、心の弱さ」を指して使われています。人間は本来的に弱い存在です。その弱さにつけ込むように、病や悪霊が入り込みます。けれども本人にはその理由も意味も分からないことが多いのです。理不尽な出来事に見舞われ、苦しみの中で、「神は本当におられるのか」と、

ある時は眩き、また、ある時は叫びたくなることもあります。忍耐でさればいいのですが耐えられない場合もあるものです。私の痛み、私の苦しみを周りの人は分かってくれません。それどころか、「あの人が苦しんでいるのは神の手にかかり撃たれたから彼は苦しんでいるのだ」と言われてしまうのです。

このような立場に置かれた時、私たちなら、何を考え、何を思うでしょうか。「何故、このようなことが起ることを神は許されるのか、聖書は「神共にいます」、「神は愛なり」と記すけれど、なぜ私はこんなに苦しいか」と問い続けることがあるでしょう。このように私たちが思うのは、多くの場合、肉体、魂の病の時です。「どうして私だけがこんなに苦しい目に遭わなければならないのか」と思う。あるいは、「この病に何の意味があるのか」と思うこともあります。人間は意味を求めます。何の為に生きているのか分からない人生は人にとって耐え難いものです。意味というのは、いわば、繋がりです。苦しい経験があっても、この経験がいずれ役に立つ、人生の糧になると考えることができれば耐えること、待つことができます。けれども、もし、その苦痛が果てしなく続くとしたら、意味を見出すことは難しくなるでしょう。これは病気に限らず人生の中で誰もが経験することだと思います。そしてこれらの不条理と思える出来事は、病気になることも含めて、私たちの日常に存在しています。誰もが、この苦しみに一刻も早く解放されたいと願うことでしょう。ですからそのために、いつも大勢の「病人」や「悪霊に取り憑かれている人々」がキリストのもとに連れて来られたのです。

休むことなく人々を癒し、救いを与え続けられるキリストの姿こそイザヤの預言の成就だとマタイは語るのです。「彼はわたしたちの患いを負い」とあります。「負う」というのは、「引き受ける」、「自分のものにする」、「背中に背負って持って行ってしまふ」という意味のある言葉です。そして彼は「わたしたちの病を担った」とも言われています。「担う」というのは、その「重荷を負う」という意味の言葉です。預言者イザヤは十字架のことばかりでなく、キリストは、私たちの病を担ってくださるお方であることを、私たちの痛みを負ってくださるお方であることを告げています。

イザヤ書 53 章は『苦難の僕の歌』と言われます。明らかにイエス・キリストのことを預言しています。なぜ、「キリストは苦難の僕」と言われるのでしょうか。私たちの病を担い、痛みを負ってくださったからでしょうか。

7 節以下に「苦役を課せられて、かがみ込み、彼は口を開かなかった」とありますから、人の病を担うこと、痛みを負うこと、それは肉体的にも精神的にも霊的にも、消耗の激しい業であることが分かります。実際、キリストは休む間もなく御言葉を語り、癒しの業を行ない、疲れ果てるほどに自らを注ぎ出されました。しかし、苦難の僕が「かがみ込み、口がきけなくなる」ほど辛かったのは、周囲の人たちから、仲間たちから軽蔑され、無視されたことにあります。

キリストに癒して戴いた多くの人々が、キリストが捕らえられて十字架につけられた時にどうしたでしょうか。弟子の多くは逃げ出しました。群衆の中には「十字架につけろ」と叫ぶ者もいました。そして「十字架につけられるのは、やむを得ない」、「律法を守らなかったからだ」、「権力者に歯向かったからだ」とさえ考えられたのであります。多くの人々は、「自分には関係ないこと」と切り捨てたのです。しかし、マタイはこの福音書を書きながら、「キリストが十字架に磔にされたのは、私たちの不義のためであった」ことに気づくのです。病を癒し、疲れ果てて蹲っておられるキリストの肩には背負わされた十字架は私たちの罪そのものであります。マタイはこの時、キリストの十字

架を見上げつつ、神が預言者を通して語ってくださった救いの計画に気づいて、「彼はわたしたちの患いを負い、わたしたちの病を担った」と書き記したのです。

キリストの体の傷は、私たちの罪のための傷だと改めて知ったのだと思います。私たちが味わう痛み、孤独、見捨てられた想いをキリストご自身が体験されました。だからこそ、私たちが苦しみの中にある時、“わたしはあなたの痛みを知っている”と語りかけてくださるのです。神は私たちを遠くから眺めておられるのではなく、私たちの苦難と一緒に担ってくださるお方です。この、共に苦しむ神の姿こそ、キリストの十字架に最もはっきりと示されています。十字架は単なる悲劇でも無意味な犠牲でもありません。そこには、私たちを救うために苦難を背負われた神の愛が表されています。

私たちは、今日、キリストが担ってくださった苦難に、神の苦しみに共に与るように招かれています。キリストと労苦を分かち合うことによって、はじめて私たちは自分自身を“キリスト者”と言えるのではないのでしょうか。“私たちの患いを負い、私たちの病を担って、共に苦難を負ってくださる神”は、今も生きておられます。苦しみの只中にある時、孤独や不安の中に居る時、共に居てくださっているのです。

マタイ福音書には、ペトロの姑が癒された時のことが、こう書かれています。「イエスがその手に触れると、熱は去り、しゅうとめは起き上がってイエスをもてなした」。「起きあがった」という言葉(εγειρόν)は、聖書では「死者が眠りから覚める」ことを意味し、「もてなした」と訳されている言葉(διακονέω)は、直訳すれば「仕える」です。

神の国では、年齢も性別も人種の違いも病人も一切問題になりません。主に癒された者は、誰でも新しい命に生きることができます。そして主に仕えて生きることが赦されているのです。しかし、そのためには十分に癒されなければなりません。弱ったまま、傷ついたままでは神と人に仕えることができないでしょう。だからこそ、主は、まず癒してくださるのです。私たちが抱えている病や弱さ、心の傷や魂の重荷を、主は全てご覧になり担ってくださっています。

私たちに新しい命を与え、私たちが癒してくださる方が今日も、主に仕える者を探しておられます。この新しい月も、主と共に歩んで参りましょう。

お祈りを致します。

聖なる神、御子イエス・キリストが、私たちの患いを負い、病を担ってくださったことを感謝致します。どうか、私たちもあなたの癒しの御手に触れられ、御言葉の力によって新しくされますように。そして、癒された者として、あなたに仕える喜びに生きることができるようにしてください。

これから私たちは聖餐の恵みに与ります。主よ、私たちがキリストの肉と血を戴くことによって、あなたご自身の働きに、宣教の御業に参与する者へとしてください。

私たちの救い主、主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌:505「歩ませてください」

聖晚餐 ニカイア・コンスタンティノポリス信条の告白 和解の挨拶

讃美歌:79「みまえにわれらつどい」

献金・感謝(増田多加子)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

天の父なる神さま、あなたの聖名を賛美致します。一人ひとりの名を呼んで、この会堂に、ライブ配信を通して、御前に呼び集めてくださいました。心から感謝致します。

私たちは本日、佃先生を通して御言葉の説き明かしを戴きました。更にその後には聖餐の恵みに与りました。今日戴いたこの御言葉を心の糧とし、この一週間を歩ませてください。

私たちには必要なものを全て与えられております。そして主の僕として歩むことが赦されております。今、夫々が与えられた物の中から感謝と献身の徴として御前にお献げ致しました。どうぞ祝して教会の御用のために用いてください。

主が教えてくださった「主の祈り」を共に祈り、この一週間を始めさせていただきます。「主の祈り」…アーメン。

派遣:讃美歌90「主よ、来たり、祝したまえ」

派遣と祝福 司式:主は言われます。「私は誰を遣わすべからずか。 会衆:私がここにおります。私を、お遣わし下さい。司式:「父が私をお遣わしになったように、私もあなた方を遣わす」と主は言われる。キリストの平和の使者として行きなさい。>

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。

報告:北支区婦人部から 報告とお願い。(1)日本基督教団隠退教職ホーム『にじのいえ信愛荘』を支えるためのチャリティーコンサート10/25(土)日、於、青山学院大学。(2)11/7(金)於、恵比寿聖徒教会 第2回東京教区全体集会。使徒信条をテーマに歌って踊る会。案内は、今週中に夫々ボックスに。

後奏:「尊き神にのみゆだねて」(J.S.バッハ)